

喪失から立ち上がっていくこと

—映画・舞台『幕が上がる』における喪失と初期仏教思想—

The Comparative Studies on Recovery from the Loss in the Movie and Stage Drama *Maku ga agaru* (*The curtain rises*) and Early Buddhist Thought

MIURA, Hirofumi

三 浦 宏 文

共通教育科目非常勤講師

抄録：

本稿では宮沢賢治の作品を引用する映画『幕が上がる』に表れた初期仏教思想を検討した。本映画中で富士ヶ丘高校演劇部員たちが吉岡先生の退職という喪失から立ち上がって行く仕方は、仏弟子達がブッダの入滅を体験する中で「自らをたよりとし、法をよりどころとして生きていく」という後の「自帰依」「法帰依」と言われる教えによって乗り越えていく姿と酷似していた。そして舞台『幕が上がる』ではそこからさらに「お互いの喪失を救い合う」という大乘仏教の境地にまで進められていたのである。

Abstract：

This study examines concepts of early Buddhism in the movie *Maku Ga Agaru* (*The Curtain Rises*) via Buddhist writer MIYAZAWA Kenji's work as quoted in the movie. It highlights similarities between how the student drama club members recover from the loss of Yoshiyoka-sensei and how the Buddha's disciples overcame their great loss after the Buddha's nirvana by adhering to the Buddha's teachings and being self-reliant. This study also emphasizes how, in the live stage versions of *Maku Ga Agaru*, the members gained additional psychological depth in keeping with the Mahāyāna Buddhist principle of reciprocal help, "to save each other's losses."

キーワード：『幕が上がる』、ももいろクローバー Z、初期仏教、大乘仏教、宮沢賢治、平田オリザ

Keywords：*Maku ga agaru* (*The curtain rises*), Momoiro clover Z, Early Buddhism, Mahayana Buddhism, MIYAZAWA Kenji, HIRATA Oriza

本稿では、人気アイドルグループであるももいろクローバーZ主演の映画『幕が上がる』とその発展版の舞台『幕が上がる』と仏教との関係について考察したい。結論を先取りしておくとして、まず映画『幕が上がる』での登場人物たちの喪失から立ち上がっていく姿が、教祖であるブッダを失うという喪失を、「教え」とその教えを受けた「自己」をよりどころとして自らをすくい上げていく仏教の基本的な動きと通じる点があるということだ。そして舞台版『幕が上がる』では、さらに喪失を共有する者同士が自らが人のために何かができる存在に成長していくことでお互いを救い合うことができるようになっていくという大乘仏教的な成長と回復の物語が出てくるのである。仏弟子たちにとって教祖でありかつ心の支えであったブッダを失った後、どうやって仏教という大きな宗教の流れを作っていくかを、映画版と舞台版の『幕が上がる』を合わせた一つの物語と関連付けながら考えていきたい。これは、考え方によっては、ある意味で『幕が上がる』という作品を新たな時代の仏教の経典としてとらえる試みでもある。では、アイドルが演ずる演劇部の女子高生たちが、喪失からの立ち上がっていく姿と、ブッダが涅槃に入った後の仏教の流れがいったいどのような共通点があるのだろうか。

1 『幕が上がる』の概要

『幕が上がる』は、劇作家・演出家である平田オリザが2012年に初めて書き下ろした小説からスタートしている¹。この小説が好評を得て2015年に映画『踊る大捜査線』の監督である本広克行のもとで映画化された²。この映画化の際に、メインキャストの演劇部の女子高生役としてアイドルグループであるももいろクローバーZ（以下ももクロ）のメンバー百田夏菜子・玉井詩織・佐々木彩夏・有安杏果・高城れにの5人が抜擢された。その後、映画の好評からその発展版である舞台『幕が上がる』が同じくももクロのメンバーの主演、本広監督の演出で作成された。その時には、原作小説の作者である平田オリザが脚本を書き下ろした。

2 ももいろクローバーZについて

次に、『幕が上がる』の一連の作品の映画からメインキャストとして関わってくる女性アイドルグループももクロについて見ておきたい。ももクロは、百田夏菜子・玉井詩織・佐々木彩夏・有安杏果・高城れにの女性5人で構成されるアイドルグループで、2008年に結成された。地上波テレビへの出演はAKB48や乃木坂46、欅坂46など他のアイドルに比べあまり多いとは言えないが、ライブ活動では2014年に女性グループで初めて国立競技場での単独コンサートを行い二日間で11万人を動員するという記録を成し遂げるなど、年間コンサート動員数で女性アーティスト1位を二度記録する（2014年及び2016年）人気を誇っている。しかし彼女達は最初から順風満帆で来たわけではなく、結成当初は全国チェーンの家電量販店の駐車場をワゴン車で回ってライブ活動を行うなど下積みの時期が長かったグループでもあった。その時の彼女達のひたむきさやファンに対する真摯な姿勢から、「モノノフ」と呼ばれる熱烈なファンたちが生まれ現在

の人気につながっている。³

また、彼女達は多くの女優が所属する芸能事務所スターダストプロモーションに全員所属していることもあり、演技のレッスンも同時に続けていて、映画やテレビドラマなどの出演経験もあった。そこで、前述した本広克行監督に5人全員が『幕が上がる』の主役及び主要メンバーとして抜擢されたのである。

しかし2018年1月に、『幕が上がる』でも中西悦子という重要な役を演じ、抜群の歌唱力とダンス、及び音楽的センスでもクロを牽引した有安杏香が惜しまれながら卒業したため、現在もクロは百田夏菜子・玉井詩織・佐々木彩夏・高城れにの4人で活動している。

3 映画『幕が上がる』の喪失

3-1 映画『幕が上がる』の概要

前述した通り『幕が上がる』は小説版、映画版、舞台版があるが最初に映画版の『幕が上がる』のあらすじから見て行きたい。

富士山のふもとにある静岡県立富士ヶ丘高校演劇部は、やる気はあるものの演劇に経験や知識のある指導者に恵まれず、地区大会で優良賞とは名ばかりの参加賞をもらうのが精いっぱい普通の演劇部であった。なんとなく流れて部長になった高橋さおり（百田夏菜子）は、部の運営に頭を悩ませる。部員で同級生の橋爪裕子（玉井詩織）や西条美紀（高城れに）や、後輩部員の加藤明美（佐々木彩夏）たちも協力しようとするのだがなかなかうまくいかない。そこに救世主が現れる。美術の新任教师吉岡美佐子（黒木華）である。たまたま美術室を借りて練習しようとしていたさおりたちは、吉岡のアドバイスで見事に自分達の演劇をどうしていくかのきっかけをつかむ。実は彼女は、「大学演劇の女王」と呼ばれた程の人物であった。さおりたちは吉岡に指導をしてくれるように必死で頼み込む。最初はとまどっていた吉岡も熱意に押されて「稽古場見学」として演劇部に参加しはじめる。

そして、吉岡の指導に演劇の面白さを見出した高橋部長たち富士ヶ丘高校演劇部に新たな戦力が加わる。高校演劇の名門校である清進学院高校からの転校生中西悦子（有安杏果）である。彼女は名門校での演劇部の活動の中でいつしか自分を追いつめてしまい声が出なくなるという症状に襲われるようになり、心配した両親が転校させたのであった。そういう転校の経緯もあり中西は最初富士ヶ丘高校の演劇部に入部することに戸惑いを見せるが、高橋部長の強い勧誘もあり一緒にやっていこうと決意する。

中西のアドバイスを受けた高橋部長の「銀河鉄道の夜」のオリジナル台本が完成し、富士ヶ丘高校演劇部は東京合宿を行うなど厳しい稽古を積み重ねていく。そして最初の関門である地区大会に満を持して挑んだ。細かい失敗はあったが、結果見事地区大会を突破し、次の県大会に行けることになった。大喜びする部員たち。気を良くした二年生の加藤は、県大会の先にある全国大会を目指すという意味で「いくぞ！全国！」とファミリーレストランで叫ぶ。吉岡もそれに応え、部員達全員が本気で県大会突破、そして全国大会を目指す気持ちを確認し合った。

しかし、ここで大事件が起きてしまう。なんと富士ヶ丘高校演劇部をここまで引き上げてきた精神的支柱でもある吉岡が退職してしまったのである。彼女は東京合宿の時に昔の演劇仲間と会い、新しい舞台の女優に勧誘されたのだった。そして悩んだ末、彼女は教師ではなく女優を選んだ。部員達は衝撃を受ける。特に吉岡に演劇の面白さを教わり、その教えを信じて一心に向上に励んできた高橋部長の心中は穏やかではなかった。落ち込み悩む日々が続いたが、高橋部長はある日部員達の前で決意を述べる。

私たちは舞台の上ならどこへでも行ける。どこへもたどり着けないとしても私はやめることは出来ない。なぜならそれは自分をやめることだから。だから、一緒に全国に行こう。⁴

この言葉に部員達は「行こう！全国」と呼応し、一体となって県大会、そしてその先の全国大会を目指す決意を固める。そして、その県大会の上演に自信満々で臨もうとするシーンで物語は終わっていく。

3-2 映画『幕が上がる』における喪失

以上、映画版『幕が上がる』の概要を追ってきた。この映画版『幕が上がる』の中での最大の喪失は吉岡先生の退職である。高橋さおり部長を始めとして、富士ヶ丘高校演劇部員は以前は「弱小」とまでは言えないにしても取り立てて良い所もない普通の地方の公立高校の演劇部であった。実は部長である高橋さおりも、演劇を始めたきっかけは友人である橋爪裕子の付添として演劇部を見学して何となく入部してしまったという程度のことだった。だから、演劇に対して知識も情熱もそれほどなく、吉岡先生や中西に「なんで演劇やってるの？」と動機を聞かれても最初は答えられなかった。その高橋部長に演劇の面白さを教え、まさに演劇に目覚めさせてくれたのは他ならぬ吉岡だった。言わば、高橋部長にとって吉岡先生は教祖のような存在であった。そして、彼女の指導によって全国大会という目標を見出し、その目標に向かって邁進しはじめたその時に、その教祖とも言える吉岡先生を失ったのである。この時の高橋部長の衝撃は計り知れないものがある。高橋部長だけではなく、西条や橋爪、中西や加藤といった部員達も同じように途方に暮れてしまったに違いない。彼女達にとって、吉岡先生の退職というのは計り知れない大きさを持った喪失であった。

3-2-1 ももクロにおける喪失

実はこの富士ヶ丘高校の演劇部員を演ずるももクロのメンバー達は、かつて同じような喪失をグループ内で経験している。ももクロは、芸能事務所スターダストプロモーション初の本格的なアイドルグループを作るプロジェクトによって結成されたのだが、結成当初はメンバーの入れ替わりが激しく暗中模索の状態であった⁵。2009年によく今のグループの原型となる百田夏菜子、早見あかり、玉井詩織、佐々木彩夏、有安杏果、高城れにの6人組みのグループが固まり、それぞれのイメージカラーも設定された（百田一赤、早見一青、玉井一黄色、佐々木一ピンク、

有安一緑、高城一紫)。そして、ようやく活動が順調に行き始めた矢先に、なんとサブリーダーである早見あかりがグループ脱退を表明するのである。早見はもともと女優志望だったので、そちらの活動に専念するためであった。ライブではMC(進行役)を任せられ精神的支柱でもあった彼女の脱退表明は、他のメンバーに衝撃を与えた。まさにこれからと言う時に、精神的支柱を失ってしまうという、この映画『幕が上がる』と同様の喪失を、演ずる彼女達は経験していたのであった。したがって、この映画の観客の中でも元々もクロのファンであった人たちは、吉岡の退職という物語上の喪失と実在するもクロメンバーの早見あかりの脱退とを重ね合わせて二重に喪失感を感じとったかもしれない。この交錯する喪失という問題は、実は舞台版の『幕が上がる』ではさらに明確な形で出て来るので、その時改めてもう一度考えてみたい。

3-3 ブッダを失った仏教徒の喪失

この吉岡先生という指導者を失った富士ヶ丘高校演劇部員たちの喪失は、仏教の歴史の中で考えればどのような状況に当たるだろうか。これは、原始仏教教団でブッダと一緒に活動していた仏弟子達が、まさにブッダの入滅を体験した状況によく似ていると私は考える。

ブッダの臨終直前の様子を記した経典として、『涅槃経』がある。この『涅槃経』は詳しくは『大般涅槃経』であるが、我が国では『涅槃経』という略称が一般的なので本稿でも『涅槃経』という呼称を使いたい⁶。この『涅槃経』には大きく分けて二つのものがあり、紀元前に編纂されたものと紀元後に創作されたものである。本稿では紀元前に編纂された『涅槃経』をもとにブッダの臨終直前の様子を見て行きたい⁷。

ブッダはベールヴァ村で雨期の定住に入ったのだが、その時に激しい痛みを伴う病にさいなまれる。なんとかその病から回復したブッダは、教えを請う従者のアーナンダに伝えてこう教えを説く。

25 アーナンダよ。わたしはもう古い朽ち、齢をかさね老衰し、人生の旅路を通り過ぎ、老齢に達した。わが齢は八十となった。譬えば古ばけた車が革紐の助けによってやっと動いて行くように、恐らくわたしの身体も革紐の助けによってもっているのだ。

しかし、向上につとめた人が一切の相を心にとどめることなく一部の感受を減ぼしたことによって、相の無い心の統一に入ってとどまるとき、そのとき、かれの身体は健全(快適)なのである。

26 それ故に、この世で自らを鳥とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を鳥とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころにせずにあれ。⁸

この時、ブッダが説いた「自らをたよりとし、法をよりどころとして」生きてゆけという教えが、後の仏教で「自帰依」「法帰依」と言われるものである。この鳥と訳している dipa を灯明と解釈して「自灯明」「法灯明」とも言われる⁹。仏教では、法というのはブッダが現れる現れないに関わらず、この世界をありのままに成立させている原理・法則である。ブッダは長年に渡る修行

によってその法を悟った。したがって、その法の教えがブッダの教えにあたる。すなわち、この「自帰依」「法帰依」とは、誰かをたよりにすることなくブッダの教えである法をたよりにして、それを自ら実践していくことを意味するのである。

3-4 喪失を「教え」で乗り越える

アーナンダたち修行僧たちは、大切な師であるブッダを失った。しかし、ブッダは自らが教えた法をたよりにして、そしてその法を学び悟った自分自身を頼りにこれからも生きてゆけと教えた。そして、実際修行僧たちはブッダの教えである法と自分自身をたよりにして生き続けている。ブッダは、その生き方も具体的に指示している。

26 アーナンダよ。ここに修行僧は身体について身体を観じ、熱心に、よく気をつけて、念じていて、世間における貪欲と憂いとを除くべきである。

感受について感受を観察し、熱心に、よく気をつけて、念じていて、世間における貪欲と憂いとを除くべきである。

心について心を観察し、熱心に、よく気をつけて、念じていて、世間における貪欲と憂いとを除くべきである。

諸々の事象について諸々の事象を観察し、熱心に、よく気をつけて、念じていて、世間における貪欲と憂いとを除くべきである。

アーナンダよ。このようにして、修行僧は自らを鳥とし、自らをたよりとして、他人をたよりとせず、法を鳥とし、法をよりどころとして、他のものをよりどころとしないのである。¹⁰

このブッダの教えにより、修行僧たちはブッダの死という喪失を乗り越えていくのである。

ここで、もう一度『幕が上がる』のクライマックスシーンの高橋部長の言葉を思い出して欲しい。高橋部長は吉岡が去って沈んでいる部員たちに向けて「私たちは舞台の上ならどこへでも行ける。どこへもたどり着けないとしても私はやめることは出来ない。なぜならそれは自分をやめることだから。」と語りかけていた。富士ヶ丘高校演劇部は、吉岡が来るまで目標を見失い何となく続けているような部活動であった。しかし、吉岡が現れる事によって見違えるような演劇部に生まれ変わっていった。特に高橋部長にとって、吉岡の教えは自分の新しい生き方の指針になっていったのである。それが「舞台の上ならどこにでもいける」という言葉に表れていると考える。すなわち、吉岡の演劇に関する教えと、それによって開かれた演出家としての可能性がさおりの生き方そのものになっているのである。だからこそ、高橋部長は、演劇を「やめることはできない。なぜならそれは自分をやめることだから」と言い切れたのである。そして、そのさおりの呼びかけに部員達も「行こう！全国！」と呼応していく。

これは、前述したブッダの教えである「自帰依」「法帰依」(「自灯明」「法灯明」)に非常によく似ていると言える。高橋部長たち富士ヶ丘高校演劇部は、吉岡の退職という喪失を、吉岡の教

えと、その教えを自らのものとした自分自身をたよりに、乗り越えて前に進んでいったのである。もちろん、死と退職とは同列に扱うにはあまりに差のある現象であるが、どちらも「大切な人の喪失」という点では共通している部分が大きいのと考える。『幕が上がる』という物語の中で、高橋部長たち富士ヶ丘高校演劇部員は、奇しくもブッダという師を失った仏教の修行僧たちと同じ仕方ですら経験した喪失を乗り越えていったのである。

4 舞台『幕が上がる』における喪失

前節まで、映画版『幕が上がる』における喪失とその乗り越え方について見てきた。次に、舞台版の『幕が上がる』の喪失とその乗り越え方について見ていきたい。

4-1 舞台『幕が上がる』の概要

まず舞台版『幕が上がる』の概要を見ておきたい。舞台版の『幕が上がる』は、映画版の続編ではなく、映画版の一場面を深く掘り下げた内容になっている。具体的には、地区大会突破後吉岡先生が退職し、その後県大会に向けてその喪失を乗り越えていこうとする部員たちの心理を丁寧に描いている。脚本は小説の原作者でもある劇作家・演出家の平田オリザ自らが執筆し¹¹、演出は映画版の監督である本広克行が務めた。主要キャストは映画版と同じだが、演劇部の下級生の演者が若干変更された¹²。公演は、2015年5月1日から24日まで東京のZeppブルーシアター六本木で行われ、二年後の2017年3月にブルーレイとDVDで映像化されている。¹³

この舞台版『幕が上がる』では、もう一つの喪失が明らかにされる。演劇の強豪校から転校してきた中西は、実は中学生の時に岩手に住んでいて、2011年の東日本大震災を被災していたのであった。そして、映画版でも演じられていた劇中劇の宮沢賢治原作の『銀河鉄道の夜』の内容がより詳しく描かれ、登場人物であるカンパネルラの死が震災を経験した中西の心理と交錯するように物語が展開されていく。そして、その中西の震災の体験における喪失を高橋部長をはじめとする部員たちが全員でひた向きに『銀河鉄道の夜』という舞台を完成させていこうとすることで乗り越えていくのである。では、舞台版の物語に沿って考察していきたい。

4-2 交錯する三つの喪失

富士ヶ丘高校演劇部は、「大学演劇の女王」と呼ばれた新しい副顧問の吉岡の指導により見事に地区大会を突破し、県大会出場の機会を得た。しかし、その県大会に向けた準備の途中で精神的支柱である吉岡が舞台女優になるために退職してしまった。部員たちの喪失感は大きく、稽古を休む部員も出始め、高橋部長は吉岡の名前に誰かが言及するだけで過敏に反応するほど気負いすぎてしまう。

そんな中、県大会でも上演する予定の『銀河鉄道の夜』の脚本で一部高橋部長が改変を加えた部分の稽古の時中西は声が出なくなってしまう。そして部員たちがその原因を考えているさなかに、ふとしたことから中西が中学生時代に岩手に住んでいて東日本大震災を経験していた事を知

る。彼女は当時盛岡に住んでいて、直接津波などの被害を受けたわけではなかったが、避難してきた同世代の話を聞いて深く傷ついていたのであった。その後、高橋部長、橋爪祐子、西条美紀たち3年生だけでカラオケボックスで稽古をする事になった時、中西は心配する高橋部長たちに絞り出すようにこう語り始める。

あの時岩手にいた中学生はみんな、どうして自分だけ生きてるんだらうって思った。思ったっていうか、感じた。どうして自分だけ生き残ったんだらうって感じた…そのあとのことは分かんない…だから、この命を大切にしようと思った子もいるだらうし、命なんてちっぽけだなんて思った子もいるだらうし…だからジョバンニの気持ちは分からない…でも、きっとジョバンニは最初から分かっていたんだと思う。カンパネルラの髪が濡れていたのをみたときから、カンパネルラが死んでいることは知ってたんだと思う。¹⁴

そして、中西はとまどう高橋部長たちに対してこう続ける。

でもね、友だちの死をうけいれるのって宇宙を一周するぐらい時間かかることでしょう？

宮沢賢治の『銀河鉄道の夜』では、ジョバンニの親友であるカンパネルラは、友人のザネリが船から落ちたのを救おうとして川に飛び込み、不幸にも亡くなってしまっていた。¹⁵ しかし、ジョバンニはカンパネルラの死が受け入れられず銀河鉄道で宇宙を旅する夢の世界に入っていたのだった。中西はそのカンパネルラを演じていた。中西にとって、自分が演じるカンパネルラの死と、多くの震災で亡くなった人の死が重なってしまったのであろう。そして、中西はさらにこう語る。

私がボランティアで知り合った中学生はね、生徒はみんな助かったんだけど、事務の人だけが最後まで職員室に残っていたんだって。先生は、生徒を連れて逃げなきゃいけなかったでしょう。だから、親との連絡とかに対応するために、一人だけ職員が残ってたんだって。

…

ザネリを助けたカンパネルラは、本当の幸せを見つけられたかな？¹⁶

この震災の学校職員の話は、実際に岩手県釜石市の小学校であったことをモデルにしていると思われる¹⁷。自らが犠牲になりながら多くの子どもたちを助けたという意味でカンパネルラと重なると中西は思ったのであろう。そして、ここで中西が言っている「本当の幸せ」という言葉は、劇中劇の『銀河鉄道の夜』の中でカンパネルラが「自分の母がどうしたら本当の幸せになれるだろう」とジョバンニに問う所から来ている。¹⁸ カンパネルラは、「僕がこの世で一番人のためになることをしたらお母さんは喜んでくれるだろうか」とジョバンニに問いかける。それに対して、ジョバンニは「誰だって、人のために本当にいいことをしたら、それが一番の幸せなんだ

よ」と答えている。このジョバンニのいう「一番の幸せ」という言葉を、中西は自らが犠牲になってザネリを助けようとしたカンパネルラと、同じく多くの生徒を助けた学校の事務職員に重ねているのである。

ここで、複数の喪失が交錯して描かれていることが分かってくる。一つ目は、映画版『幕が上がる』でのメインテーマであり、舞台版『幕が上がる』の前提として富士ヶ丘高校演劇部員に共有されている恩師であり精神的支柱である「吉岡先生の退職という喪失」である。そして、さらに中西が中学生時代に体験した「震災による喪失」である。この「震災による喪失」も、中西が他の演劇部員に話すことで、演劇部員に共有される喪失になっていく。そして、さらに中西の失語とその後語った「震災による喪失」から改めて部員全員が考えさせられた『銀河鉄道の夜』に描かれる「カンパネルラの死という喪失」である。この舞台版『幕が上がる』で、高橋部長たちはこの交錯する三つの喪失に向き合っていくことになるのである。交錯する喪失という問題は、映画版の時にも脱退したももクロのメンバーである早見あかりのことを以前からのももクロファンである観客にはのめかすような描写があったが、舞台版では直接登場人物たちが三つの交錯する喪失に遭遇する姿が描かれる。では、どうやって彼女たちはこの喪失を乗り越えていくのだろうか。

4-3 人のためになにかが出来る

この後、高橋部長をはじめとする富士ヶ丘高校演劇部員たちは、劇中劇の『銀河鉄道の夜』の稽古を再開する。その稽古に中西は現れなかった。しかし、高橋部長たちは中西が帰ってくることを信じて稽古に専念する。その稽古を続ける劇中劇『銀河鉄道の夜』の中で、さそりの話が出てくる。メキシコの砂漠で様々な生き物を食べて暮らしていたさそりは、きつねに追われて井戸に飛び込みおぼれて今にも死にそうになる。その時さそりは、たくさんの命を奪って食べてきたこれまでの生き方を悔やみ、神様に次の人生では誰かの幸せのために生きて、そして死ぬようにと祈るのである。すると、いつのまにかさそりの身体は燃え出し暗闇を照らすようになったという話であった。¹⁹ この話が稽古の中で出てきた時に、高橋部長は部員の西条こと「ガルル」に話しかける。母子家庭に育った「ガルル」は、カンパネルラの死を淡々とジョバンニに告げるカンパネルラの父の気持ち理解できないと悩んでいた。そのため、高橋部長はそれに対する答えをずっと考えていたのである。

（前略）吉岡先生が全部の登場人物には、全部役割があるっていったでしょ。（中略）お父さんはジョバンニがカンパネルラの死を受け入れるために登場するんじゃないかな。（中略）中西さんが言ってたじゃない、友だちの死を受け入れるのは宇宙を一周するくらい時間がかかるって。（中略）でもお父さんは45分で受け入れた。受入れて、ジョバンニのことも気遣ってくれた。（中略）大人になるってたぶん、そういうことなんだよ（中略）人のために何かをしたりとか、そういうことは大人じゃなきゃできないでしょ。²⁰

そして、高橋部長はまた稽古を始め、上達した部員たちのことを褒めながらこう言う。

みんな誰でも（引用者注：主役である）カンパネラになれる。

...

もう、みんなちょっとだけカンパネラだもん。（中略）みんな、人のために少しずつ何か出来る。²¹

高橋部長ら富士ヶ丘高校演劇部員たちは、全員が「人のために少しずつ何か出来る」大人へと成長することによって、「吉岡先生の退職という喪失」と「震災による喪失」、そして「カンパネラの死という喪失」の三つの喪失を乗り越えて行こうとするのである。演劇という集団による芸術を完成させようとする部活動を通して、彼女たちはみんなが少しずつ大人になっていくこと、すなわち人のために何か出来る存在へと成長することが、彼女たちの喪失の乗り越え方だったのである。

4-4 原始仏教から大乘仏教へ

そしてこの舞台版『幕が上がる』における喪失の乗り越え方は、は、映画版『幕が上がる』の喪失の乗り越え方を一段階進化（あるいは深化）させている。映画版『幕が上がる』では、「吉岡先生の教え」と、「その教えを实践していく自分自身」をたよりに生きていく、仏教的に言えばブッダ以来の「法帰依」「自帰依」を前提にしていた。舞台版では、それをさらに「人のために少しずつ何か出来る」という他者を救っていく方向に拡大しているのである。高橋部長たち富士ヶ丘高校演劇部員たちは、同じ喪失を抱えながら、仲間である中西がさらに別の喪失を抱えていることに気づいた。そのことから、自分だけが「吉岡先生の教え」と「その教えを实践していく自分自身」を頼りに喪失から回復していくのではなく、さらに一歩進んで自分たちが皆「人のために少しずつ何か出来る」大人へと成長することで、中西とともにみんなで喪失から回復していこうという方向に進んでいったのである。この言わば、「みんなで成長して救い合っていく」という方向性への進化（深化）は、ブッダ由来の原始仏教から「自利利他」を目指す大乘仏教への進化（深化）という流れに、まさに一致していると考えられる。映画版『幕が上がる』を掘り下げてつくられた舞台版『幕が上がる』は、その喪失の乗り越え方も、原始仏教から大乘仏教への進化（進化）に近い形で深められていたのである。

4-5 「つながっていてもひとり」という在り方

これまで映画版と舞台版の『幕が上がる』を喪失の乗り越え方という側面から仏教と関連させて考えてきた。最後に、映画版と舞台版に共通する劇中劇の『銀河鉄道の夜』の登場人物のことはについて考えてみたい。

この劇中劇は宮沢賢治の童話『銀河鉄道の夜』を原作として、小説『幕が上がる』の原作者平田オリザが脚本をつくっている。宮沢賢治は仏教の、特に『法華経』の信仰の厚い人であったの

で²²、人のために本当にいいことをすることが一番の幸せというような大乘仏教的な考え方が当然物語の中に出てくる。しかし、平田オリザはそういう側面を描きつつも、いわゆる自己犠牲的な要素に少し距離をおいたことばを劇中劇の登場人物、特にジョバンニに語らせている。これは、舞台版『幕が上がる』のラストシーンで、ジョバンニがカンパネルラの死をようやく受入れ、亡くなったであろうカンパネルラに語りかける場面に出てくることばである。

宇宙はどんどん広がっていく。だから、人間はいつも一人だ。つながっていても、いつも一人だ。

人間は、生まれた時から、いつもひとりだ。でも、一人でも、宇宙から見ればみんな一緒だ。

みんな一緒でも、みんな一人だ。²³

このことばは、どんなに思い合っている親友でも、その人にはなれないことを、たとえつながっていたとしても、最終的には一人の独立した存在であるということを述べたものである。これは、『幕が上がる』の劇中では高橋部長が国語の授業で谷川俊太郎の「20億光年の孤独」という詩を教わり²⁴、それをヒントにして考えたとされている。谷川の詩の影響はもちろんあるだろうが、筆者は原作・脚本の平田自身がコミュニケーション論に関して「似た意見を掲げ合うのではなく相手との違いを認めた上での共感」を重視する立場であることに関連していると考えられる²⁵。

どんなに思い合っても、あなたと私は違う人間である。私はあなたにはなれないし、あなたの苦しみを代わってあげることは出来ない。しかし、あなたの喪失には寄り添うことが出来るし、一緒に乗り越えようとする事は出来る。そういう思いをジョバンニを通じて平田は描きたかったのではないだろうか。

その意味で、この舞台版『幕が上がる』は仏教のさらに新しい進化（深化）の方向を指し示しているようにも考えられる。仏教、特に大乘仏教では一般に他者への自己犠牲的な献身、すなわち「自利利他」のうち、特に利他行を強調することが多いように思う。もちろん、利他行は重要だが、その前提として「あなたと私は違うのだ」という認識を持つことが必要なのではないだろうか。あなたと私は違う。つながっていても、みんな一緒でも、最終的には一人の独立した存在である。でも、だからこそあなたのために少しずつ何かができるかもしれない。このような形でこそ、真の意味での仏教が掲げる「自利利他円満」という境地に到達できるのではないだろうか。ふと視点を世界に向けてみると、現代は異なる宗教同士が、いや同じ宗教でも宗派によって、違いを認められないためにぶつかり合う時代になっている。このような時代に必要とされる仏教を探求する上で、『幕が上がる』で描かれた富士ヶ丘高校演劇部員たちの「違いをみとめながら、みんなが人のために何かが出来ると」存在を目指す教えは、大きな示唆を与えてくれるのである。

注

- 1 平田オリザ『幕が上がる』講談社・2012年。
- 2 『幕が上がる』(ブルーレイ & DVD) 販売元：東映株式会社・東映ビデオ株式会社・発売元：フジテレビ・2015年。
- 3 ももクロの概要については wikipedia のももいろクローバーZの項目を参照。この項目は多くの資料を渉猟されており非常に信頼性があると言える。(一部筆者も協力した) <https://ja.wikipedia.org/wiki/ももいろクローバーZ> (2017年11月15日参照)
- 4 映画版の台詞については前掲のブルーレイの音声から筆者自身が聞き取っている。
- 5 同上 wikipedia のももいろクローバーZの項目を参照。
- 6 涅槃経に関しては、田上太秀『涅槃経を読む』(講談社学術文庫) 講談社・2004年第1刷(2017年第13刷)及び、高崎直道『涅槃経を読む』(岩波現代文庫) 岩波書店・2014年第1刷を参照。
- 7 紀元前に編纂された『涅槃経』については、*The Digha Nikāya*, ed. by T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter, vol. II, London, The Pali Text Society, 1903. をテキストとして用いた。またこれは、インド哲学・仏教学者の中村元が『ブッダ最後の旅—大パニッパナ経』中村元訳・岩波書店(岩波文庫)・1980年第1刷(2011年第44刷)と題して訳している。翻訳に際してはこの中村訳を参照し、同書の頁も併記した。
- 8 Ahaṃ kho paṇ' Ānanda etarahi jiṇṇo vuddho mahallako addha-gato vayo anuppatto, asītiko me vayo vattati. Seyyathā pi Ānanda jara-sakaṭaṃ vegha-missakena yāpeti, evaṃ eva kho Ānanda vegha-missakena maññe Tathagatassa kayo yāpeti. Yasmim Ānanda samayate Tathāgato sabba-nimittānaṃ amanasi-kārā ekaccānaṃ vedanānaṃ nirodhā animittam cetto-samādhim upasampajja viharati, phāsu-kato Ānanda tasmimsamaye Tathāgatassa kayo hoti.
26. Tasmā ih' Ānanda atta-dīpā viharatha atta-saraṇā anañña-saraṇa, dhamma-dīpā dhamma-saraṇā anañña-saraṇa. (*The Digha Nikāya*, p. 100, ll.11~22. 『ブッダ最後の旅』65-66頁。)
- 9 前掲『ブッダ最後の旅』の中村元による六四頁の注を参照。253-254頁。
- 10 'Idh' Ānanda bhikkhu kāye kāyānupassī viharati ātāpī sampajāno satimā vineyya loke abhijjhā-domanassaṃ, vedanāsu ... peti ... cite ... pe ..., dhammesu dhammānupassī viharati ātāpī sampajāno satimā vineyya loke abhijjhā-domanassaṃ evaṃ kho Ānanda bhikkhu atta-dīpo viharati atta-saraṇo anañña-saraṇo, dhamma-dīpo dhamma-saraṇo anañña-saraṇo. (*The Digha Nikāya*, p. 100, ll. 25~31. 前掲『ブッダ最後の旅』66頁。)
- 11 舞台版の脚本に関しては、『KAWADE 夢ムック 文芸別冊 総特集平田オリザ』河出書房新社・2015年に戯曲「幕が上がる」として収録されている。
- 12 Wikipedia の『幕が上がる』の記事を参照。 https://ja.wikipedia.org/wiki/幕が上がる#cite_note-50 (2018年5月11日参照)
- 13 舞台版『幕が上がる』(ブルーレイ & DVD) 販売元：Parco・2017年。
- 14 戯曲「幕が上がる」(『KAWADE 夢ムック 文芸別冊 総特集平田オリザ』河出書房新社・2015年) 80頁。なお舞台版の台詞に関しては、主に前掲書の収録の戯曲のものを元にしてはいるが、一部上記映像作品の音声の元に省略したり改変したものもある。それについては指示している。
- 15 『銀河鉄道の夜』に関しては、様々な本に収録されているが、本書では宮沢賢治作・谷川徹三編『童話集 銀河鉄道の夜』(岩波文庫) 岩波書店・1951年第1刷(2017年第93刷)と宮沢賢治『銀河鉄道の夜』(角川文庫) 角川書店・1996年改定新版(2017年改定40版)を主として参照した。角川文庫版が1996年の筑摩書房版全集(『[新] 校本宮沢賢治全集』を元にしており第4次校の最終形を収録しているのに対し、岩波文庫版は谷川徹三の校訂で第3次校が混交した形になっておりブルカニロ博士が出てくるストーリーになっている。
- 16 前掲戯曲「幕が上がる」80-81頁。
- 17 岩手県釜石市立鵜住居小学校での話をモデルにしていると思われる。
<https://www.asahi.com/articles/DA3S11640271.html> (2018年5月5日閲覧)
- 18 原作の『銀河鉄道の夜』では、「ほんとうによいこと」の内容は述べられていない。岩波版305-306頁、角川版173頁。
- 19 このさそりの話は原作の『銀河鉄道の夜』とはほぼ同じ内容であるが、原作では場面がバルドラの野原になっている。岩波版351頁、角川版212-213頁。
- 20 前掲戯曲「幕が上がる」89頁。なお、ここの高橋部長の台詞は部員である西条ことガルルとの対話の中で話されているが、長さの都合上ガルルの受け答えの台詞は省略した。
- 21 前掲戯曲「幕が上がる」90-91頁。
- 22 宮沢賢治は浄土真宗の熱心な信徒の家庭に育ったが、18歳で『法華経』に出会って以来『法華経』に傾倒し、田中智学が設立した法華経系の信仰団体・国柱会にも一時入信している。宮沢賢治に関しては様々な著書があるが、本書では見田宗介『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』(岩波現代文庫) 岩波書店2001年第1刷(2008年第4刷)を主として参照した。
- 23 前掲戯曲「幕が上がる」93頁。
- 24 この授業の様子は映画版で描かれている。谷川俊太郎の同詩に関しては谷川俊太郎『二十億光年の孤独』集英社(集英社文庫)2008年第1刷(2016年第10刷)などに収録されている。
- 25 平田オリザ『わかりあえないことから—コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書・2012年第1刷を参照。

[参考文献]

1 パーリ語文献

The Digha Nikāya, ed. by T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter, vol. II . London, The Pali Text Society, 1903.

2 邦文文献

田上太秀

『涅槃経を読む』(講談社学術文庫) 講談社・2004年第1刷(2017年第13刷)

高崎直道

『涅槃経を読む』(岩波現代文庫) 岩波書店・2014年第1刷

谷川俊太郎

『二十億光年の孤独』集英社(集英社文庫) 2008年第1刷(2016年第10刷)

中村元

『ブッダ最後の旅－大パニッバーナ経』中村元訳・岩波書店(岩波文庫)・1980年第1刷(2011年第44刷)

平田オリザ

『幕が上がる』講談社・2012年

「戯曲 幕が上がる」『KAWADE 夢ムック 文芸別冊 総特集平田オリザ』河出書房新社・2015年

『わかりあえないことから－コミュニケーション能力とは何か』講談社現代新書・2012年第1刷

見田宗介

『宮沢賢治 存在の祭りの中へ』(岩波現代文庫) 岩波書店 2001年第1刷(2008年第4刷)

宮沢賢治

『童話集 銀河鉄道の夜』(谷川徹三編)(岩波文庫) 岩波書店・1951年第1刷(2017年第93刷)

『銀河鉄道の夜』(角川文庫) 角川書店・1996年改定新版(2017年改定40版)

3 映像資料

映画版『幕が上がる』(ブルーレイ & DVD) 販売元: 東映株式会社・東映ビデオ株式会社・発売元: フジテレビ・2015年。

舞台版『幕が上がる』(ブルーレイ & DVD) 販売元: Parco・2017年

4 ウェブ情報

Wikipedia: ももいろクローバーZ

<https://ja.wikipedia.org/wiki/ももいろクローバーZ> (2017年11月15日参照)

『朝日新聞』岩手県釜石市立鶴住居小学校に関する記事

<https://www.asahi.com/articles/DA3S11640271.html> (2018年5月5日閲覧)